

毎年6月に中高のクラス会があり、今年は幹事を引き受けました。何人か、欠席続きの友人たちに電話をしてみました。参加してくれた友人もいて、本当に嬉しかったのですが、欠席せざるを得ない事情がある友人たちがおられることも知り、心が痛みました。仲良しだったKさんがその一人です。「妻は難病にかかり、電話に出て話すこともできないのです」とのお答えに驚き、悲しかったです。けれども御夫君はとても優しい若々しいお声でした。こんなにソフトな感じの方がKさんの傍におられるから、Kさんは幸せだと感じ、とてもほっとしたのです。手紙は読んでもらえるかとお尋ねすると、それは大丈夫ですというご返事でしたので、カードを送りました。難病となれば、治療が困難で、回復の希望がなかなか見えないでしょう。でも、医療技術が日進月歩で進んでいます。夫も2度のがんが完治していますので、彼女の上にもそれを祈っているのです。同時に、充実した時を過ごして70歳の坂を越えた今となれば、日々の穏やかさに身を委ねていければ、それなりにいい人生だと言えるのではないかとも思っています。



左Kさん 4人目私（十和田湖で）

Kさんは中学の同級生です。真剣に勉強し、学年トップの優等生でした。綺麗な笑顔を絶やさず、静かで上品な物腰、まさにお手本。のんびり、好き放題に学生生活をおくっているガサツな私とは大違いでした。通学路が同じで、私たちは仲良しになりました。

彼女はそのままでは飽き足らず、県立の進学校を受験して、離れて行きました。淋しくなり、次第に疎遠になりましたが、母校には一芸に秀でる、個性溢れる才女が多く、華やかで楽しい友人たちが一杯で、幸せでした。Kさんが御茶ノ水女子大へ進んだことを知り、さすがに違うなあと感心したものです。

クラス会が終わった後に、2度目のカードを送りました。クラス・メートの消息やどんなプログラムを楽しんだか、また、中学時代のKさんとの思い出を書きました。栞のような小さい聖句カードも同封しました。KさんはYWCAのメンバーでもあったので、おなじみの聖句だと思ったからです。

昨日、Kさんの御夫君の代筆でお便りをいただきました。開封するまではなんとなく不安がよぎりました。けれども、お手紙を読みましたら、目頭が熱くなって、嬉しさに身が軽くなる思いになりました。御夫君は弱られたKさんをいたわっておられました。そして、私が送ったカードの作者の名前に目を止めて下さったのです。作者は同級生の穂積夏子さんです。私は彼女のカードを利用してきました。御夫君は夏子さんの母上をご存じで、恩師だと書いておられました。その奇遇を喜んで下さいました。また、栞の聖句「それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。(1コリ13:13)」について、このように書いておられました。

「三つの信念のうち、一番優れているものは、聖書世界の常識としての信仰ではなく、愛だということは驚きでした。希望より信仰よりも愛が優れていると聖書が告げているとは」

私はKさんの御夫君の文字を読みながら、Kさん夫妻の間の優しい愛の関係、今まさにそれを最も必要としているKさんを支えておられる御夫君の思いを感じ、胸が熱くなりました。